

妻と二人で行った温泉で、
同期夫婦と夜まで一緒になった話

待宵草

登場人物紹介

健

美咲の夫。翔太とは同じ会社の同期。
真面目で慎重。場の様子を見るタイプ。

美咲

健の妻。
普段はおとなしく、初対面では控えめ。

翔太

結衣の夫。健の同期。
ノリがよく、場を動かしやすい。

結衣

翔太の妻。美咲とはこの日が初対面。
社交的で、距離の詰め方が早い。

出発の朝、美咲が「健、鍵持った？」って聞いてきた。ここ数ヶ月仕事が忙しくて、どこにも行けてなかったの、休みが重なったタイミングで温泉に行くことにした。

美咲が先に旅館を見つけて、「ここ安くなってる」と画面を見せてきただけだ。俺も反対する理由はなかった。

駅まで並んで歩いて、特急に乗る。窓側に座った美咲が予約確認の画面を何度か見ては、到着時間を確認していた。

俺はほとんど窓の外を見ていたけど、時折美咲の方を向くと、美咲は笑顔で俺を見てた。

「何時に着くんだったけ」

「一時ちょっと過ぎ。昼食は向こうでいい？」

「いいよ。着いてからで」

途中で買ったお茶を分けて飲む。美咲が「久々に二人で出かけてるね」と言ったので、俺は「そうだな」と返した。

特別な話をしたわけじゃない。ただ、普段とは違う会話を俺も楽しんでいた。

駅に着いてタクシーを拾った。美咲が運転手に旅館の名前を言って、俺は荷物を足元に置く。着くまで十分もかかってないと思う。

タクシーを降りて二人で受付に向かった。苗字を伝えて、
鍵と部屋の案内を受け取る。

美咲が「何階？」と聞いてきたので、紙を見ながら
「三階」と答えたあたりだったと思う。

その直後、後ろから名前を呼ばれた。

「健？」

振り返ったら、同じ会社の同期の高橋翔太が立ってた。
仕事と、たまに飲むくらいの付き合いで、夫婦で
会ったことはほとんどない。

「え、嘘だろ。お前もか」

「たまたま。今日から一泊」

「何でこんなところで会うんだよ」

「俺もそう思った」

翔太の隣に女の人がいて、先に笑って挨拶をしてきた。

「妻の結衣です。いつも翔太がお世話になっていきます」

「あ、佐藤健です。こっちは妻の美咲です」

隣にいた美咲も、少し遅れて頭を下げた。

「美咲です。よろしくお願いします」

「こちらこそ。まさか同じ旅館で会うとは思わなかったです」

結衣が笑うと、翔太も横で頷いた。

「俺も受付で名前呼ばれて、似た名前だなと思ってたんだよ。そしたら本人いたからびっくりしたわ」

「俺らも今着いたところ」

「こっちも同じ。結衣が朝から早く行こうってうるさくてさ」

「ちょっと。私だけみたいに言わないでよ」

結衣が翔太の腕を軽く叩いた。

美咲がそれを見て笑った。

「楽しみにしてたんですね」

「してました。久しぶりの温泉なので。美咲さんたちも？」

「うちも久しぶりです。最近、健がずっと仕事だったから」

「あー、それ俺も知ってる」

翔太がすぐに入ってきた。

「こいつ最近ずっと残ってたもんな。俺が帰る時もまだいたし」

「お前も結構残ってただろ」

「俺は要領悪いだけ」

翔太が笑う。

仕事の話になると、美咲も少し話しやすくなったのか、
「家でも疲れたってずっと言っていました」と普通に会話に入っていた。

「じゃあ今日はゆっくりしないとですね」

結衣がそう言って、美咲の方を見る。

「ここの温泉、写真だと結構よさそうでしたよね」

「私も見ました。露天風呂が広そうで」

「そうそう。私、あれ楽しみで」

そこから少しだけ、旅館の話になった。

夕食は何時からなのかとか、売店は何時まで開いてるのかとか、本当にそれくらいの話だったと思う。

翔太が部屋番号の書かれた紙を見ながら言った。

「俺ら三〇五。お前らは？」

「三〇六」

一瞬、四人とも黙った。

「……隣じゃん」

翔太が先に笑った。

「マジかよ。ここまで被る？」

「さすがに出来すぎだろ」

俺が言うと、美咲も苦笑いした。

「なんかすごい偶然ですね」

結衣はむしろ面白そうに笑っていた。

「じゃあ、何かあったらすぐ呼べますね」

「いや、呼ばなくていいだろ」

翔太がすぐ返して、みんなで少し笑った。

「まあ、また後で会いそうだな」

「隣なら確実ですね」

そんな感じで、一度それぞれの部屋に向かうことになった。

「じゃあ、また見かけたら」

結衣が美咲にそう言うと、美咲も「はい」と笑って返した。

俺たちはそのままエレベーターに乗った。

扉が閉まってから、美咲が小さな声で言った。

「翔太さん、ほんとに会社でもあんな感じなの？」

「だいたいあんな感じ」

「奥さんも話しやすそうな人だったね」

「初対面にしてはよく喋るなとは思った」

「でも私は助かった。知らない人だと何話したらいいか
分かんないし」

そんな話をしているうちに三階に着いた。

部屋に入ると、美咲はすぐに窓の方へ行った。

「結構いいじゃん」

俺も荷物を置いて外を見る。写真で見たより山が近く
て、

下には川も見えた。

とりあえず一息つこうということになって、俺は座椅子
に座り、美咲はバッグから荷物を出し始めた。

部屋で少し休んでから、美咲が「飲み物買ってくる」
と言ったので、俺も一緒に下へ降りた。

夕食まではまだ時間がある。売店には土産物と飲み物が
並んでいて、美咲は冷蔵ケースの前でお茶を見
ていた。

「これでいい？」

「俺は水でいいよ」

そう言って横の棚を見ていたら、少し離れたところから声がした。

「また会った」

結衣だった。

その後ろに翔太もいて、手には缶ビールを二本持っている。

「お前、もう飲むの？」

「部屋で一本くらいいいだろ」

「夕飯前だぞ」

「だから一本なんだよ」

翔太がそう言って笑った。

美咲と結衣は、その横に置いてあった館内案内を見ている。

「ここ、貸切露天風呂が有名なんですよ」

結衣が館内案内を見ながら言った。

美咲も横から覗き込む。

「あ、それ私も見ました」

「結構人気みたいですね」

「そうなんです。私たちも予約しようとしたんですけど、
もう埋まってて」

美咲が少し残念そうに笑った。

「せっかく来たから入りたかったんですけどね」

「え、取れなかったんですか？」

「はい。予約した時にはもう空いてなくて」

結衣が翔太の方を見た。

「うちは取れたよね？」

「ああ。夕方のやつ」

翔太が缶ビールを持ったまま答える。

「マジで？いいな」

俺が言うと、翔太が笑った。

「お前ら取れなかったの？」

「そう。美咲が結構楽しみにしてたんだけど」

「健、それ言わなくていいでしょ」

美咲が少し笑いながら俺を見る。

結衣も笑った。

「でも分かります。写真、結構よかったですよね」

「そうなんです。景色も良さそうで」

美咲と結衣がそのまま貸切露天の話をしていると、翔太が横から口を挟んだ。

「じゃあ一緒に入る？」

一瞬、美咲が止まった。

「え？」

「いや、四人くらい入れるんだろ？俺らの枠」

翔太が案内を指さした。

「せっかく取れなかったなら、一緒に入ればいいじゃん」

「いやいや、普通そうなる？」

俺が笑うと、翔太も笑った。

「別に貸切なんだし。知らないやつと入るわけじゃないだろ」

「さっき会ったばかりみたいなもんだろ」

「会社で何年一緒にいると思ってんだよ」

「夫婦同士ではほぼ初対面だろ」

俺がそう返すと、結衣が美咲の方を見た。

「私は全然気にしないですけど、美咲さんが嫌じゃなければ」

美咲は少し困ったように笑った。

「さすがにちょっと恥ずかしいですね」

「まあ、そりゃそうだよな」

俺もそう言った。

翔太はまだ軽い調子だった。

「嫌なら全然いいけどさ。せっかく来たのに入れないのももったいないだろ」

美咲は少し考えてから俺を見る。

「健はどう思う？」

「俺は……美咲が嫌じゃないなら」

「それ一番ずるい答えじゃない？」

美咲が笑った。

結衣もつられて笑う。

「でも私も、美咲さんが大丈夫なら全然」

少しだけ間があった。

美咲は案内をもう一度見てから、小さく息を吐いた。

「じゃあ……せっかくだし、入ってみます？」

「お、決まり」

翔太がすぐに反応した。

「まだちょっと恥ずかしいですけど」

「それは私もです」

結衣がそう言って笑った。

そんな流れで、夕食の前に翔太たちが取っていた貸切露天風呂へ、四人で入ることになった。

話が決まると、一度それぞれの部屋に戻ることになった。

エレベーターの前で翔太が言う。

「予約、四時半からだから。十分前くらいに出ればいいだろ」

「分かった」

「じゃあ廊下で」

結衣が美咲に手を振って、二人は隣の部屋に入ってしまった。

俺たちも部屋に戻る。

扉が閉まると、美咲がそのまま俺の方を見た。

「ほんとに一緒に入るの？」

「今さら？」

「いや、決めたけど」

美咲はそう言いながら、バッグの中からタオルを取り出した。

「ちょっと恥ずかしくなってきた」

「だったらやめてもいいんじゃない？」

「そこまでじゃない」

「じゃあいいだろ」

「健は平気なの？」

「俺も普通に恥ずかしいよ」

そう答えると、美咲が少し笑った。

「翔太さん、軽いよね」

「昔からあんな感じ」

「結衣さんも普通に乗ってたし」

「夫婦で慣れてるんじゃない？」

「何に？」

「いや、こういうノリに」

「びっくりした」

美咲はそう言いながら、浴衣の帯を手を取った。

旅館に来た時にもらった浴衣に着替えるらしい。

「これで行く？」

「いいんじゃない？」

「健も着替えて」

「今？」

「せっかく温泉来たんだし」

言われたので、俺も浴衣を出した。

着替えている間も、美咲は何度か鏡を見ていた。帯がずれてないか確認したり、髪をまとめ直したりしている。

「別にそんな気にしなくてもいいだろ」

「気にするでしょ。初対面の人と一緒になんだから」

「風呂入ったら結局濡れるけど」

「そういう話じゃない」

美咲が呆れたように笑った。

時間を見ると、そろそろ出た方がよさそうだった。

俺がタオルを持って、美咲が部屋の鍵を確認する。

廊下に出ると、ほぼ同じタイミングで隣の扉も開いた。

「あ、ちょうど」

結衣も浴衣に着替えていた。

翔太はもう完全に旅行気分なのか、片手に小さいタオルだけ持っている。

「行くか」

「早くない？」

「十分前って言ったのお前だろ」

「そうだった」

四人で廊下を歩く。

さっきまで普通にロビーで話していただけなのに、
これから一緒に貸切風呂に入るとすると、少し変な感じがした。

美咲も同じなのか、俺の横を歩きながらさっきより口数が少ない。

一方で結衣は普通だった。

「露天、写真だと結構広かったですよね」

「四人でも余裕あるって書いてました」

美咲もそう返す。

「楽しみですね」

「はい。ちょっと緊張しますけど」

「私もです」

二人で笑っていた。

廊下の突き当たりを曲がると、「貸切露天風呂」と書かれた案内が見えた。

翔太が受付でもらった鍵を取り出す。

「ここだな」

扉の前まで来ると、美咲が一度だけ俺の方を見た。

俺も何となく美咲を見る。

「入る？」

「ここまで来て聞く？」

美咲が小さく笑った。

翔太が鍵を開ける。

そのまま四人で、中へ入った。

中は脱衣所になっていて、その先に洗い場と露天が見えた。結衣が先に口を開いた。

「先に入ってください。私たち、少し後で」

美咲も横で頷いた。

「お願いします」

「分かった」

俺がそう返すと、翔太も「了解」と言って、奥へ進む。扉を閉めて、二人で服を脱いだ。

特に話すこともなくて、シャワーを浴びて体を流す。

先に湯につかったのは翔太だった。俺も続いて縁に座る。

湯気で少し先が見えにくい。

向こうの脱衣所からは、二人の女性の声だけが聞こえた。

「隣の部屋まで被るとはな」

翔太が湯を手ですくいながら言った。

「出来すぎだろ」

「お前、本当にいいのか」

「何が」

「一緒に入る流れ。美咲さん、さっき微妙だっただろ」

「本人がいいって言ったし」

「ならいいけど」

翔太が少し笑う。俺は湯の温度を確認するために、手を動かした。

「結衣は最初から平気そうだったな」

「ああ。ああいうの、あんまり気にしない」

「仕事の話してる時より気まずいぞ」

「だよな」

それ以上は言わなかった。後ろで扉が開く音がして、女の声が近づいてきた。

美咲のことが気になっていた。本人も恥ずかしいと言っていたし、俺も落ち着かない。

それでも、このあと結衣の体が見えるんだと思うと、それとは別に少し興奮していた。

しばらくして、脱衣所の扉が開いた。

美咲と結衣が、バスタオルを巻いて出てくる。二人とも少し顔が赤い。

美咲が恥ずかしそうなのは分かっていたけど、結衣も今は同じだった。

さっきまで普通に話していたのに、俺が湯の中になると、こちらへ来る足が止まっている。

体の線はタオルの上からでも分かった。結衣は細くて、巻いたタオルの上からでもスタイルがいいのが見えた。

見ない方がいいと思いながら、目が行っていた。美咲のことが気になりつつも、少し興奮している自分もいた。

「冷えるぞ、そこ」

翔太が先に言った。結衣は湯の縁の手前で止まって、タオルの端を握ったまま笑っている。

「分かってる。でも、入るとなると別だよ」

「先に入ってて、って言ったのお前だろ」

「言ったけど。健さんがいると、さすがに」

結衣がちらっと俺を見て、すぐ目を逸らした。美咲は結衣の少し後ろにいる。

「美咲は？」

と俺が問いかけると結衣が後ろを振り返る。美咲は困ったように小さく笑った。

「私も、まだちょっと、正直、落ち着かない」

美咲がこっちを見た。

翔太が湯を手ですくって、笑った。

「四人で入って決めたのはお前らだぞ。今さらそこで固まれてもな」

「決めたのは分かっています」

結衣がそう返して、それでも一歩だけ前に出る。石の床は濡れていて、美咲もつられて半歩出た。まだ湯には入らない。

縁の外で、タオルを巻き直している。

「湯、熱いです？」

美咲が縁の方を見ながら聞いた。

「普通。ぬるくはない」

俺が答えると、結衣が手だけ出して水面に触れた。

「ちょうどいいくらい。冷えるから、座った方がいいよ」

「どこに座ればいいんですか」

美咲が小さな声で聞いた。

「そこ空いてるだろ。俺らの向かい」

翔太が反対側の縁を顎で示す。結衣が美咲を見て、

「座る？」と聞いた。美咲は「うん」とだけ答えた。

二人で縁に腰を下ろす。タオルはまだ巻いたままだ。湯気の中で、誰から先に動くでもない時間が少し続いた。

美咲は膝を揃えたまま、俺の目を見ない。結衣も肩に手を置いて、俯き気味だった。

「それ、つけたまま入るのはマナー違反だぞ」

翔太が湯の中から言った。美咲がタオルの合わせを押さえる。結衣も手元を見て、聞き返す。

「え、そうなの」

「そうだよ。湯に浸けるなって、どこでも書いてあるだろ」

「でも、いきなりは」

美咲が小さな声で言った。翔太は軽い調子のままだった。

「入るなら外すだろ。そこに座ってるだけでも、このあと浸かるなら同じだぞ」

結衣が湯の中の俺たちを見て、すぐ返した。

「あんたたちだって、タオル巻いたまま入ってるじゃん」

腰のあたりを顎で示される。言われてみればその通りだった。俺も翔太も、脱衣所から濡れタオルを巻いたまま湯に入っていた。

「……それは悪かった」

翔太が短く笑って、縁に手をつく。そのまま腰のタオルを親指でずらして、外した。布が縁に落ちる。

湯の外に出ていた下半身が、そのまま見えた。

一瞬だった。美咲も結衣も、視線がそこへ行った。

結衣はすぐ顔を上げたけど、目を逸らすまでに一拍あった。美咲は半拍遅れて、タオルの合わせを握り直しながら横を向いた。

見ないようにしているのに、今のは見えてしまったのが分かった。

湯気のせいもある。それでも、二人の視線が同じ場所で止まったのははっきりしていた。

「健も取れよ。お前だけ巻いてるの変だろ」

翔太が湯の中で体を向けてくる。美咲がちらっと俺を見た。結衣は正面を向いたまま、次の動きを待っている。

「……ああ」

乗っかるしかなかった。腰のタオルを外して、縁に置く。

隠すものがなくなって、湯から出ている部分までそのままになった。

美咲はもう見ないようにしていた。結衣は視線だけ一度下げて、すぐ戻した。

「次は二人の番だろ」

俺が言った。自分でも、少し吹っ切れていた。隠すものがなくなったせいか、さっきまでより言葉が出やすい。

美咲も結衣も顔が赤い。湯気のせいだけじゃないのが分かった。

「……分かってる」

結衣が小さく言った。すぐには外さない。

「美咲も、冷えるぞ」

「まだ」

美咲はタオルの合わせを押さえたまま、首だけ振った。

「一人ずつでいいだろ。結衣、お前先に行けよ」

翔太が湯の中から言った。

「私から？」

「先に入ってて、って言ったのお前だろ」

「それはそうだけど」

結衣が美咲を見る。美咲は「先でいいよ」と小さな声で返した。

しばらく誰も動かない。水の音だけがした。

結衣が立ち上がって、タオルの端を持つ。一拍置いて、息を吐いた。

「もういいや。見るなら見て。私、入るから」

そのまま外した。布が縁に落ちる。細かった。肩から腰までの線がはっきりして、胸は美咲ほど大きくない。

正面から見ると、タオルの上から見ていた時より近かった。

「おお」

翔太が先に声を出した。

「おお……」

俺も、出してしまった。隠すつもりはなかった。結衣はそれに気づいている。気づいたまま、両手で隠さなかった。

「そんな声出さないでよ」

「だって、いきなり外すもんな」

「言ったでしょ。見るなら見てって」

「見てるよ」

翔太がそう返す。美咲は「結衣さん」とだけ言って、目を逸らして、また戻った。

「美咲さんも、あとでいいから」

結衣はそう言って、縁を降りる。そのまま湯につかると、
水面が肩まで上がった。

「ほら、普通でしょ」

「普通か？今の」

俺が聞くと、結衣が湯の中で小さく笑った。

「入っちゃえば、思ってたより平気」

美咲はタオルを巻いたまま、その横で固まっていた。

「美咲さんは？一人だけ残る方が気まずいくらいだぞ」

翔太が湯の中から言った。美咲はタオルの合わせを握ったまま、結衣を見る。

「私、まだ」

「入っちゃえば平気だよ。さっき私もそうだったし」

結衣が隣から声をかけた。美咲は小さく首を振る。

「結衣さんとは違う」

「何が」

「普段から、そういうの得意じゃないし」

「私も得意じゃないし……」

「今さら得意とかないでしょ。俺らも恥ずかしいし」

翔太の声はまだ軽い。美咲が俺の方を見た。

「あとは美咲だけだぞ」

美咲が短く笑って、すぐ真顔に戻る。縁に座ったまま、しばらく動かなかった。

「冷えるぞ、ほんとに」

俺がもう一度言うと、美咲は「分かってる」と返した。タオルの端を指で持つ。一拍置いて、息を吐いた。

「……もう知らない。入るから」

外した。布が膝から落ちて、縁に置かれる。

美咲は結衣より胸が大きくて、腰のあたりに柔らかさがあった。自分の妻なのに、人前だと別物に見えた。

隠そうとして腕が動いて、途中で止まった。

「おお」

翔太がまた声を出した。

「……美咲」

俺も、名前だけ出た。美咲は顔を真っ赤にしたまま、こちらを見ない。

自分の妻の裸を、同期が正面から見ている。止めた方がいいのに、変に興奮した。美咲は腕で胸を隠しかけて、
途中でやめた。

手が下りると、大きさがそのまま出る。

普段から目が行く場所だった。形がきれいで、湯気の中でも重みが分かった。俺だけが触ってきた場所を、今は翔太が正面から見ている。

俺だけのものが他人に晒されているのに、それを止められない自分がいた。美咲は縁を降りる。

水面がまず大きな胸の下まで上がって、肩まで沈むのに少し時間がかかる。湯が動いて、結衣の隣に並んだ。

「気持ちいい」

美咲が小さく言った。

「ほら、入っちゃえば案外気にならないし、お湯加減よくて気持ちいいよね」